熊本地震救援③　～キッズルームの運営～

当院は、南阿蘇村にホスピタル dERU（domestic Emergency Response Unit　フィールドホスピタル）の外来棟、レントゲン、手術室を輸送して医療救護を行っていましたが、後ろの避難所である南阿蘇中学校体育館を運営している村役場の保健師さんや世話役の方々から、日が経つにつれて避難者のストレスが指摘されるようになりました。体育館には多くの避難者がおられ、運動場は車中泊の方の車が止められており、子供が走ったり遊んだりする場所がない状況でした。学校が休校となっていたこともあり、行き場のない子供たちのストレスだけではなく、狭い体育館の中で子供が走ったり、高い声を出したりすることで、大人までストレスを感じているというような声が聞こえ始めました。

当院は国際医療救援活動も活発に行っておりますが、海外では被災後に子供のこころのケアのために、子供の遊び場を提供すること（Child Friendly Space）がよく行われています。2015 年のネパールの地震でも、子供用テントを立てて遊ぶスペースを提供しました。

これらの経験から、当院の持つホスピタル dERU にも、子供用テントとおもちゃが以前から子供の遊び場用ユニットとして備えられており、今回のこの状況から展開することとしました。発災から 2 週間が経過した 4 月 29 日に、テント一張り（約 40 平米）をホスピタル dERU の前に設営し、中にオモチャを入れました。

このテントをキッズルームと名付け、現地の役場と共同運用することにしました。地元のボランティアさんたちにも手伝ってもらい、常時 2～3 名の大人が世話役として付き、子供と保護者が自由に出入り出来るようにしました。

この「キッズルーム」は、こちらの予想を超えるほど好評をもって利用され、手品をしたり、バルーンアートを作ったり、読み聞かせをしたりといった多くのボランティアが自然発生的にこのテントにやってきては、様々な方法で子供たちと遊んでくれました。

子供だけではなく、保護者にとっても息抜きになり、また子供の相手をする当院職員にとっても、癒しの時間となりました。このテントは、ホスピタル dERU が撤収する 5 月 15 日に同時に撤収されましたが、保護者の中には、このテントだけでも継続して置いてもらえないかと、要望される方もおられました。このテントに来た時だけ、子供が笑うとおっしゃった保護者もおられました。

今後は、運用面をもう少しきちんと詰め、またもっと早期から設営できないかが課題です。また、撤収時期についても、地元に運営を引き継ぐなどで、もう少し長期に設置する方法も考えたいと思います。